

2. 木津北・東地区の特性

2-1 地形・地質

木津北・東地区の地形・地質等をまとめると次のように整理できる。

概要

・木津北地区の概要

- 北側部分は花崗岩でできた強固な岩盤で形成され、小さな尾根・谷が複雑に入組む急峻な形状。
- 南側部分は大和青垣地域の北端に位置し、低標高ではほとんど見られなくなった大阪層群（砂泥互層）により湧水湿地が形成されており、地質学的に希少かつ生物多様性の保全において重要。

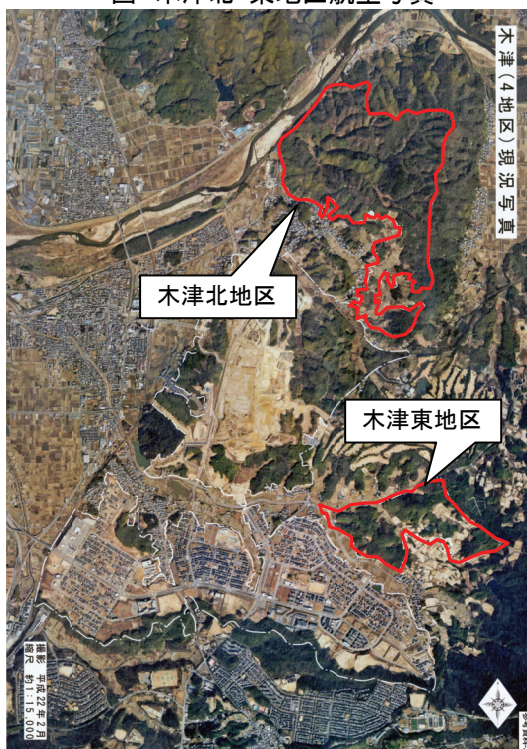
・木津東地区の概要

- 全体的になだらかであり岩盤等はない。
- 木津北地区同様に大阪層群が残存するが、地質的には木津北地区とは異なり湧水湿地は形成されにくい（礫層）。

<木津北地区の地形・地質>

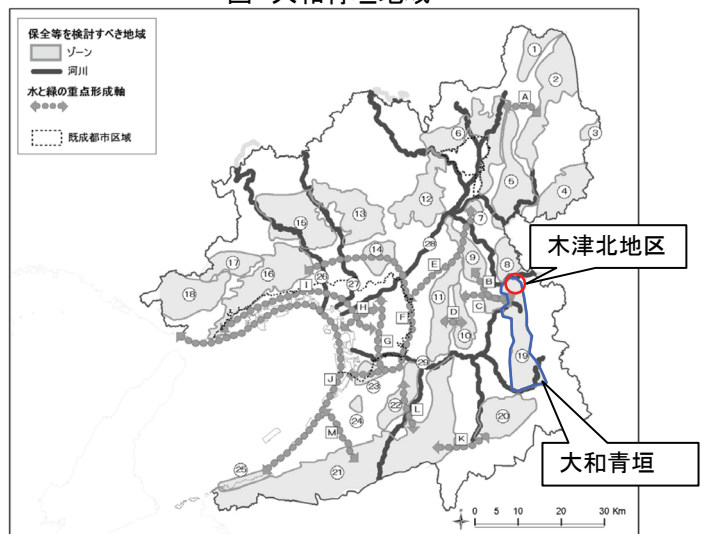
地形の特徴は地区の東側が鹿背山の尾根筋となっており、かつ地区の北側部分は小さな尾根・谷が複雑に入組む急峻な形状となっている。南側部分は地区の中では比較的緩傾斜で、農地等が棚田状に広がっている。地質的に、北側部分はかつて木津川が氾濫する原因となるほどの硬い岩盤（花崗岩）である一方、南側部分は湧水湿地を形成しやすい大阪層群で構成されている。平成 18 年に「近畿圏における自然環境の総点検等に関する検討会議」が取りまとめた「近畿圏の都市環境インフラのグランドデザイン」においても、同地区は保全等を検討すべき地域に指定された「大和青垣地域」の北端に位置している。さらに、大阪層群は昭和 30 年代後半から急速に進んだ都市の開発により、低標高にある地質においてはほとんど残されていないため、この地区での残存は地質学的に重要である。また、湧水湿地が多く見られることからカスミサンショウウオをはじめとする湿地性動植物の生息に適しており、けいはんな丘陵の生物多様性にとって大変重要な区域となっている。

図 木津北・東地区航空写真



（出典：UR都市機構）

図 大和青垣地域



（出典：近畿圏の都市環境インフラのグランドデザイン）

＜木津東地区の地形・地質＞

地形の特徴は木津北地区と比較して全体的になだらかであり、広く農地として活用されている場所が多い。地質的に木津北地区と異なり、岩盤等はなく沖積層や礫層の大阪層群で構成されている。

図 現況地形

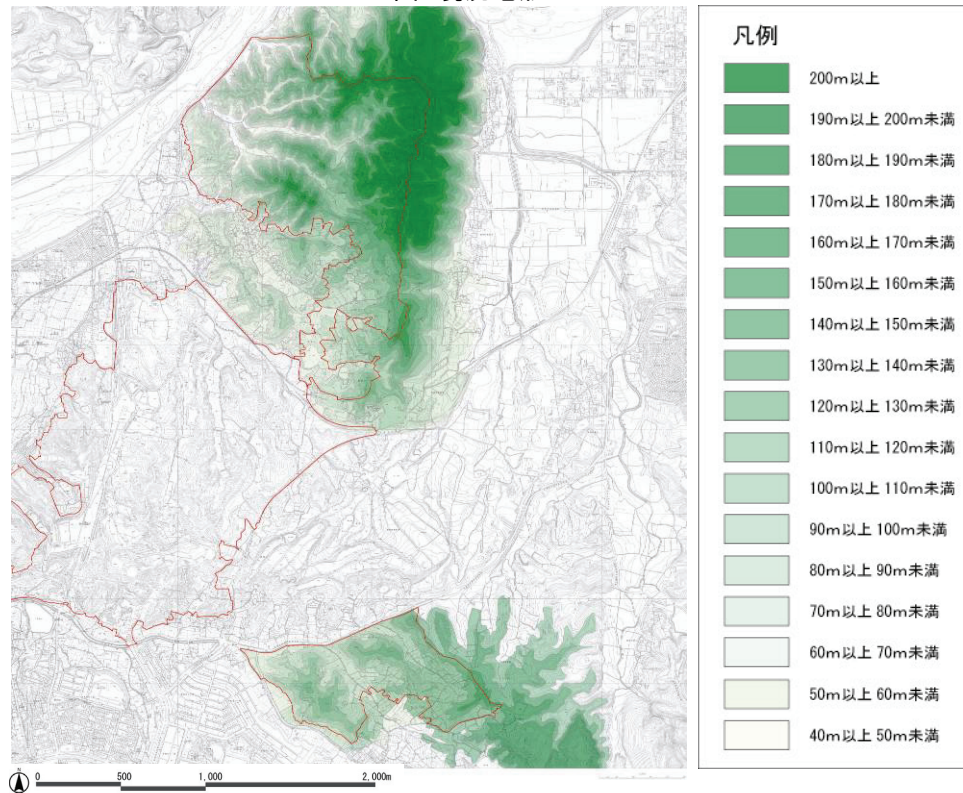
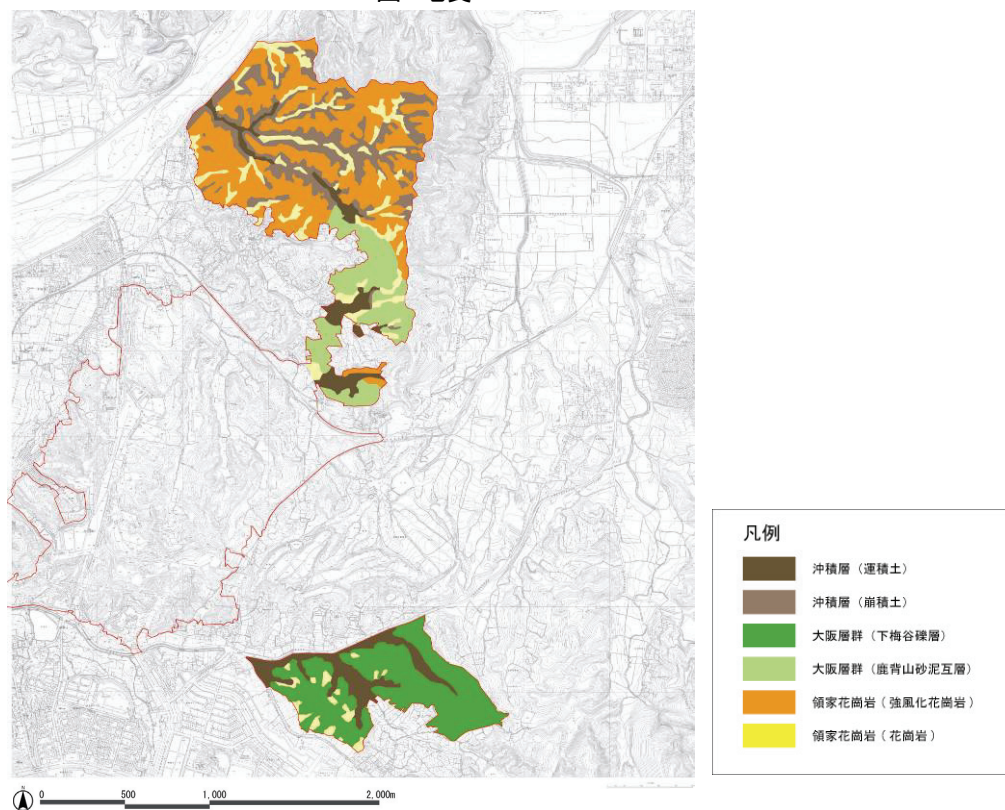


図 地質



（出典：UR都市機構提供資料）

2-2 植生

木津北・東地区の植生をまとめると次のように整理できる。

概要

- ・ 木津北地区の概要
 - 平成 5 年頃はオオタカの営巣に適したアカマツ林が東側に点在しているとともに、コナラ林等の二次林や水田などで構成されていた。
 - 平成 15 年頃はアカマツ林や水田が一部残る程度になるとともに、モウソウチク・マダケ等の範囲が広がっていることから、耕作放棄地や適切な管理がなされない場所が拡大している。
- ・ 木津東地区の概要
 - 谷筋部分の多くは耕作地として活用され、尾根部分等はアカマツ林や落葉広葉樹林等が群生し、代表的な里山であったと考えられる。
 - 現在は、一部において竹の侵食・繁茂や二次林の荒廃が進んでいると考えられる。

＜木津北地区の植生＞

平成 5 年頃はオオタカの営巣に適したアカマツ林が地区東側に多くみられるほか、コナラ林等の二次林や水田などの里山としての名残が確認できる。また、モウソウチク等は地区の中央部や西端部等に小規模な群落として点在している。

しかし、平成 15 年頃になるとアカマツ林の範囲が小さくなり、地区東側の一部に残る程度になるとともに、水田も地区南側を残しほとんど確認することができない。一方、モウソウチク・マダケ等の範囲が広がり、谷筋にはネザサが繁茂していることから、耕作放棄地や適切な管理がなされない場所が拡大していると考えられる。オオタカの営巣が確認できなくなったのもこの頃であり、植生の面からも生物多様性の確保が難しくなっていると考えられる。市民団体等による持続的な里山の管理等により、平成 20 年から連続してオオタカの営巣が確認されていることから、一部において里山が回復している。

＜木津東地区の植生＞

昭和 59 年頃は地形が緩傾斜であることもあり、谷筋部分の多くは耕作地として活用されている。尾根部分等はアカマツ林や落葉広葉樹林であり、人々の生活の営みとともに形成される代表的な里山であったことが考えられる。

現在は、一部においてモウソウチク等の竹の侵食・繁茂や二次林の荒廃が進んでいると考えられる。

図 植生(木津北地区:平成 5 年、木津東地区:昭和 59 年)

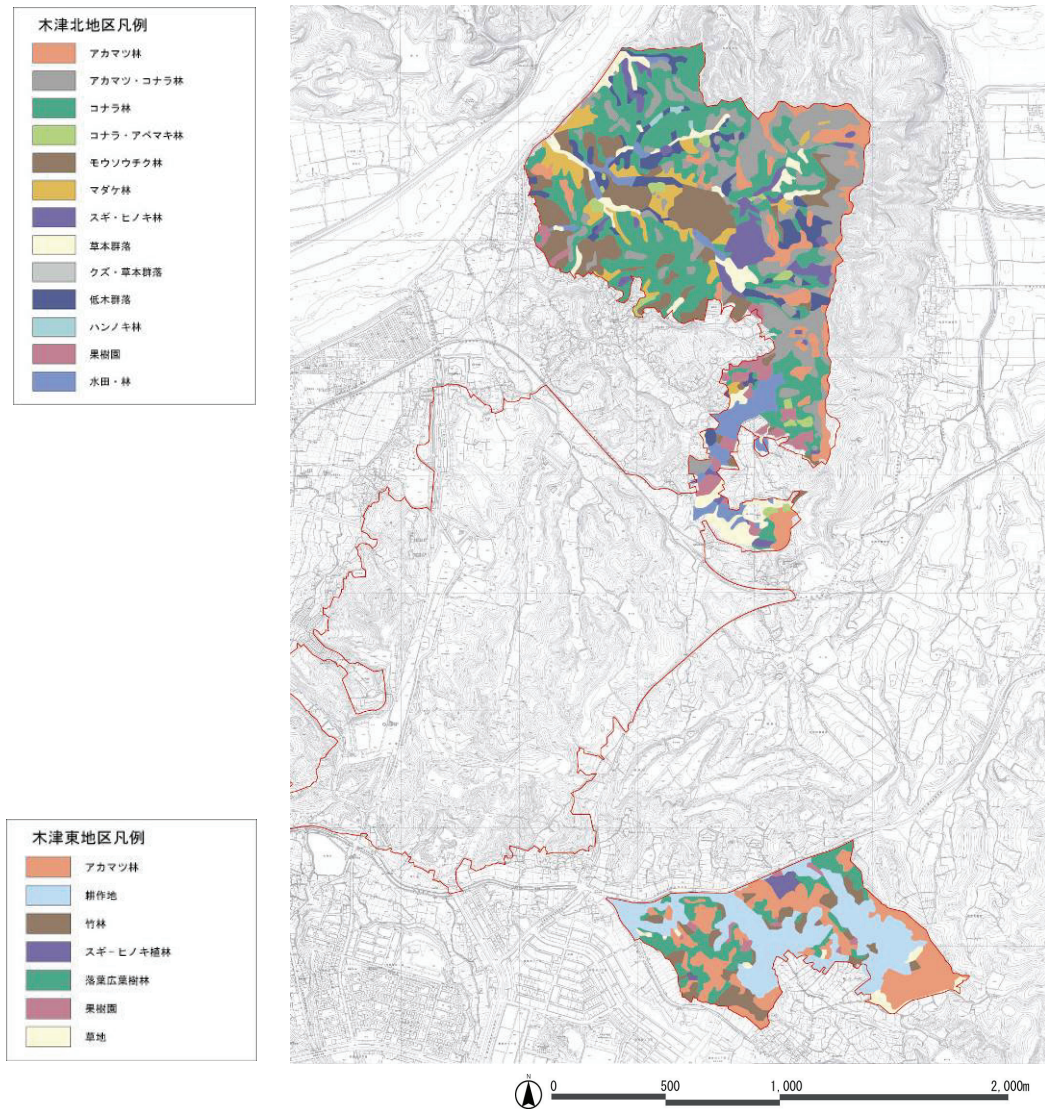
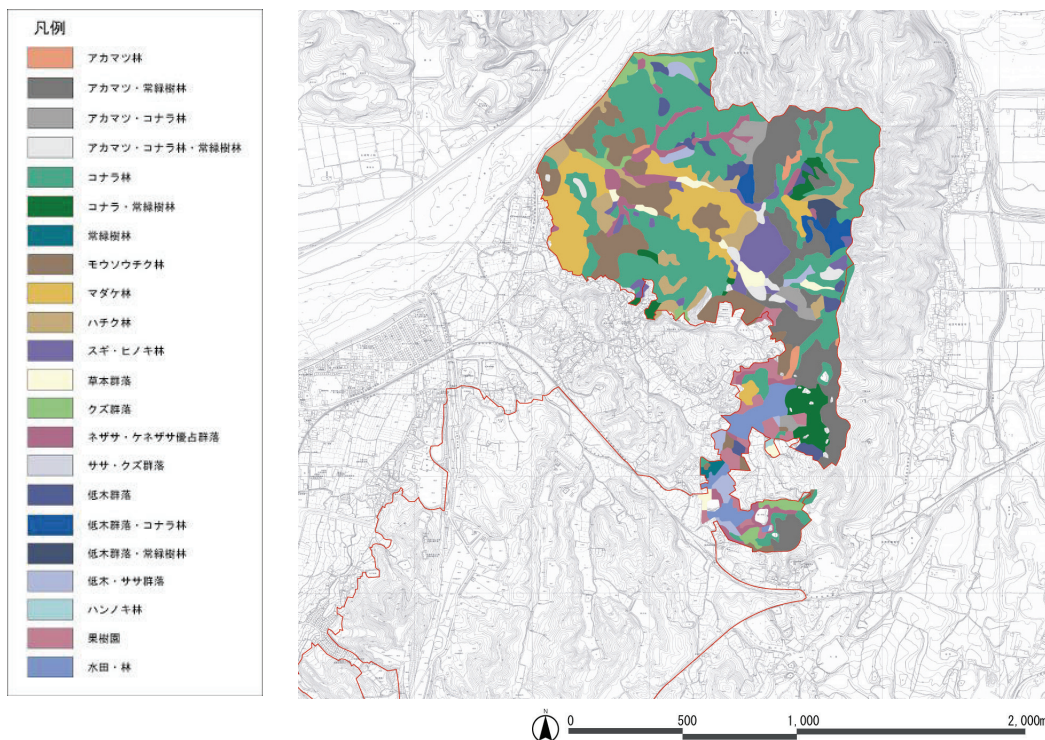


図 植生(木津北地区:平成 15 年)



(出典:平成 20 年度木津地区モニタリング調査報告書/平成 21 年 11 月、UR都市機構提供資料)

2-3 貴重種の保全

木津北地区にはオオタカ・カスミサンショウウオ等の貴重種が生息しており、これらの保全に向けた取り組みが行われている。

貴重種の概要

- ・平成5年から平成11年まで、木津北地区においてオオタカの継続的な営巣が確認されている。
- ・その後、一時営巣が見られなくなったが、平成20年から再び木津北地区にて営巣が確認されている。
- ・平成22年にカスミサンショウウオの幼生が木津北地区において確認されている。

貴重種の保全に関する取り組みの概要

- ・UR都市機構により平成15年度からオオタカの営巣環境の保全と里山環境の再生を目指し、継続的な里山管理が行われている。
- ・カスミサンショウウオは個体の保護、生息に適した環境を整備するとともに移殖に取り組んでいる。

<貴重種>

オオタカは一般的にはアカマツ林が広く分布する地域に生息することが多く、アカマツの枝などを積み重ねて営巣することが多い。また、営巣場所は飛翔空間が確保された場所（それほど高木が密集していない場所）と、採餌するための場所が整っている必要がある。

木津北地区ではこうしたオオタカの生息に適した植生（アカマツ林）や里山活動により創出される採餌空間が整っており、平成5年から平成11年まで、地区の東側等で継続的な営巣が確認されている。その後、平成15年頃からアカマツ林の減少や適切な管理がなされない場所の増大とともに木津北地区での営巣が確認されなくなり、代わりに別の地区で営巣が確認され始めた。

しかし、オオタカの営巣が見られなくなった同じ頃に、保全に向けた取り組みがはじまり、再び平成20年頃から連続して木津北地区での営巣が確認されている。このことから、一度は木津北地区からいなくなったオオタカが戻ってきていると考えられる。

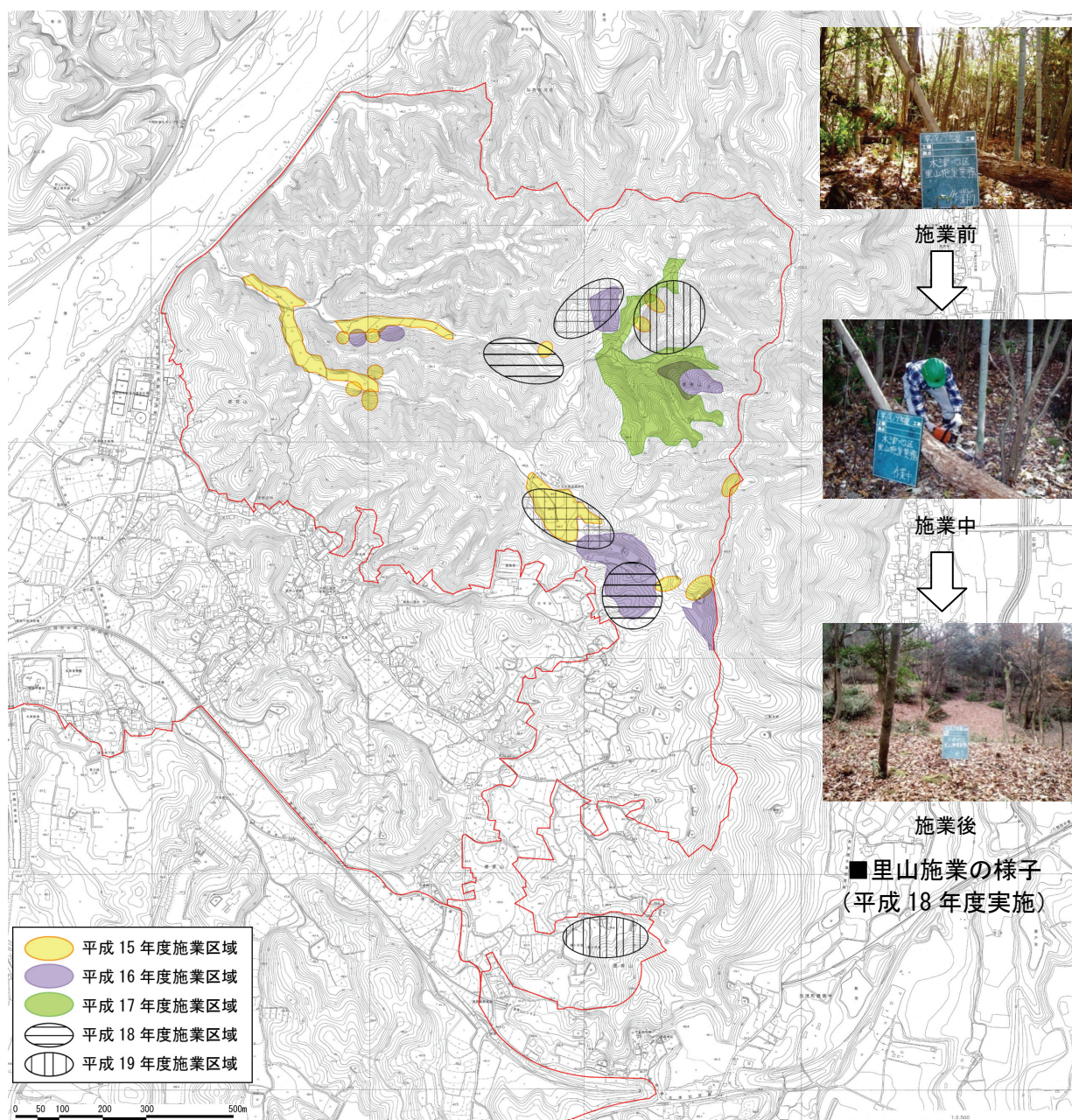
また、平成22年には木津北地区の谷筋部分において、カスミサンショウウオの幼生が確認されている。

<保全に関する取り組み>

平成15年度からはじまった、UR都市機構の所有地内における保全に向けた取り組みは、アカマツ林の更新や里山らしい空間の創出（コナラ林育成、竹林伐採、草地刈払い等）等の里山管理を継続的に実施し、オオタカの営巣環境の保全と里山環境の再生を目指している。

また、カスミサンショウウオについては個体の保護、生息に適した環境を整備するとともに移殖に取り組んでいる。

図 UR都市機構の所有地内における里山の保全活動



(出典:UR都市機構提供資料に加筆)

表 施業の概要

主な内容	効果
アカマツ更新	アカマツの更新を確認。 林床が明るくなったことによる活発な萌芽更新・草類の増加。
アカマツ林育成	里山らしい景観改善。 萌芽更新や稚樹の成長、残存木の成長促進による林分※密度の再高密度化。
コナラ林育成	林床が明るくなったことによる萌芽更新・ササの成長の活発化。
竹林伐採	間伐を行うことで環境は改善するが、繁茂を抑制するためには継続的な実施が必要。
竹林拡大防止	数は少ないが、竹の再進入を確認。
草地刈払い	水田や畑として利用を再開した場所以外はササや草類が再生し、管理する前に近い状態。

※:参考-6 用語集を参照

2-4 地元や市民団体等の活動

オオタカの保全等の活動実施を引き金に、市民等の里山活動に対する機運が高まり、現在複数の団体が木津北地区等をフィールドとして活動を展開している。

里山や自然とのふれあい等の活動概要

- ・鹿背山倶楽部により、木津北地区の自然環境や貴重種等の保全を目標にした取組みを通じて、学研都市住民の里庭として愛される環境づくりに向けた里山活動が展開されている。
- ・鹿背山元気プロジェクトにより、里山の自然環境再生とそれを支える社会的な仕組みの確立を目指した活動（アカマツ林の再生、シイタケの森づくり、里山キャンプ等）が行われている。

木津川アートの活動概要

- ・木津川アートは平城遷都 1300 年祭を期に、まちをアートの力によって再認識する企画としてはじまった、第 26 回国民文化祭・京都 2011 木津川市事業の 1 つである。

<里山や自然とのふれあい等にかかる地元や市民団体等の活動>

里山活動に呼応した市民等が主体的・積極的に活動を始め、現在では里山再生や自然とのふれあい等を通じたコミュニティ形成、オオタカの保全等を目的とした団体が活動している。

表 活動する市民団体等

主な団体名	概要
鹿背山倶楽部	<ul style="list-style-type: none"> ・学研都市にとって貴重な財産空間となる木津北地区の自然環境や貴重種等に着目し、学研都市住民の里庭として愛される環境づくりに向けた里山活動を行う組織。 ・放置竹林の伐採、ビオトープづくり、カスミサランショウウオの保護等。
鹿背山元気プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿背山の里山の自然環境再生とそれを支える社会的な仕組みの確立を目指す組織。 ・アカマツ林の再生、健康な森・シイタケの森づくり、柿畑再生、竹林の手入れ、里山キャンプ等を実施。 ・木津川市こどもエコクラブとの共催による自然観察会やウォークラリー、2010 年秋には里山のアートイベントを実施。

写真 鹿背山元気プロジェクトの活動



図 地元や市民団体等による里山活動

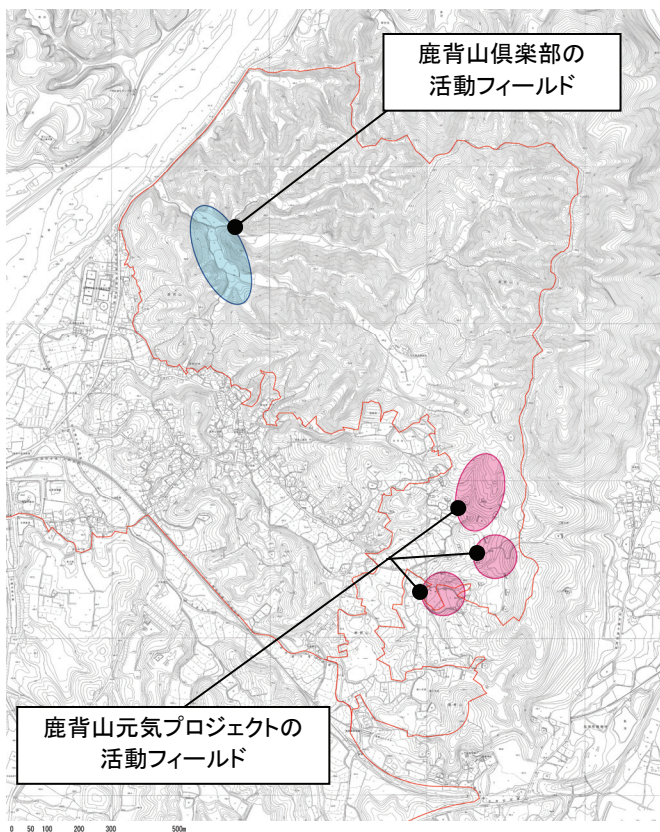


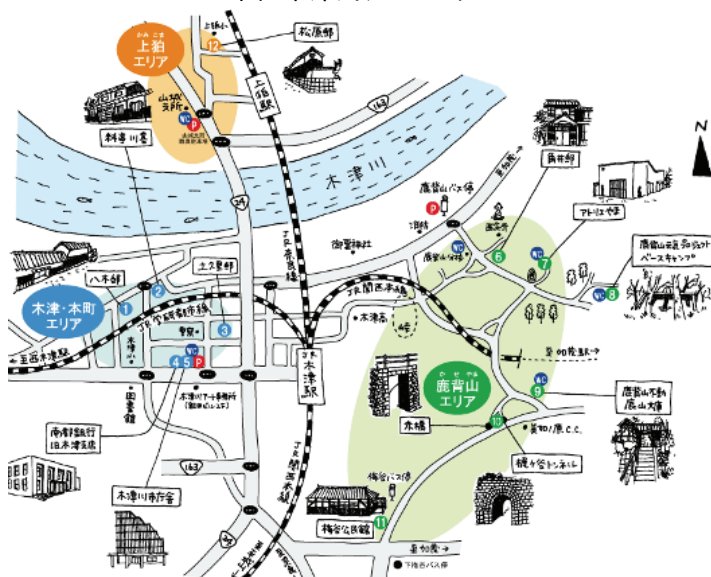
写真 鹿背山倶楽部の活動



<木津川アート>

木津川市は万葉の時代から育まれた文化が住民の誇りとなって受け継がれている。木津川アートは平城遷都 1300 年祭を期に、まちをアートの力によって再認識する企画としてはじまった、第 26 回国民文化祭・京都 2011 木津川市事業の 1 つである。木津川市内の使われなくなった建物、何か懐かしい風景、アートを感じさせる空間などを利用し、展示やパフォーマンスを行っている。

図 木津川アートマップ



(出典: 木津川アートHP)

写真 木津川アート作品事例



2-5 歴史・観光・文化等

今後活用に向けた取組みが必要となる地域特性（歴史・観光・文化等）をまとめると、次のように整理できる。

歴史的に価値の高い鹿背山城跡の概要

- ・木津北地区には室町・戦国期の大和・山城地域の歴史・文化を考えるうえで極めて重要で、近畿有数の規模を誇る山城（南山城最大）の遺跡である鹿背山城跡がある。

里山としての観光・文化等の概要

- ・木津北地区では鹿背山柿、木津東地区では梅谷大根が生産されている。
- ・鹿背山柿は後継者不足等に悩む農家の協力により「鹿背山の柿を育てるネットワーク」を組成し、栽培の取組みを行っている。
- ・鹿背山焼（陶芸品）の窯があり、その燃料や販売用にシバ（松・雑木）を刈っていた。現在は陶芸家や彫刻家が芸術活動を行っている。

<歴史的に価値の高い鹿背山城跡>

鹿背山城跡は木津川市鹿背山鹿曲田に所在し、標高 136m の通称「城山」の山頂付近にある中世の山城である。城跡の範囲はほぼ鹿背山全山を城郭としており、東西 350m、南北 300m の近畿有数の規模を誇り、南山城最大のものである。鹿背山城跡は興福寺、松永久秀と続く大和一国支配の拠点であり、室町・戦国期の大和・山城地域の歴史・文化を考えるうえで極めて重要な遺跡である。

図 鹿背山城跡位置



（出典：木津川市内遺跡発掘調査概報Ⅲ／平成 22 年）

図 鹿背山城イメージ



（出典：木津川市内遺跡発掘調査概報Ⅲ／平成 22 年）

<里山としての観光・文化等>

①鹿背山柿・大根

木津北地区の鹿背山では鹿背山柿、木津東地区では梅谷大根が生産されている。また、後継者不足に悩む農家が50名程度の会員の協力を得て、「鹿背山の柿を育てるネットワーク」を組成し、栽培に取り組んでいる。

写真 鹿背山柿



(出典：京都府HP)

②鹿背山焼

鹿背山には良好な土があり、瓦や鹿背山焼等の地元産業があった。また、燃料としてシバ(松・雑木)を刈るほか、町へも販売していた。現在では陶芸家や彫刻家が芸術活動を行っている。

(出典：木津東部丘陵持続可能都市整備構想検討会／平成20年度)

2-6 木津北・東地区と人の生活との係わり

歴史的経緯を勘案した木津北・東地区と人の生活との係わりは以下のとおりである。

木津北・東地区と人の生活との係わり

・木津北・東地区は都市部の安全・安心な生活を確保するために、住民による主体的な里山管理等が行われてきた地域である。

→江戸時代、木津北・東地区が位置する鹿背山とその南部にかけての山々は江戸時代の頃は「惣山」と呼ばれる緑が生い茂る地域であった。

→この地域は当初、住民の立ち入りが禁止された「留山」であったが、土砂流出等の災害をもたらしていた。

→そのため、都市部の安全・安心な生活を確保することを目的として、麓に住む住民が主体的に下草刈等を行い良好な里山・森林の維持管理を実施することとなった。

(参考文献：木津町史)

2-7 木津北・東地区の特性

木津北・東地区の特性を総合的に勘案して取りまとめると、以下のように整理できる。

地形・地質、植生、貴重種等を踏まえた特性

- ・木津北地区はかつて木津川が氾濫する原因となるほどの固い岩盤で形成される一方で、近年の都市開発により失われつつある湧水湿地が形成されやすい大阪層群が残る地質的に価値の高い地区である。
- ・大阪層群によって形成される湿地はカスミサンショウウオの生息地に適しているほか、アカマツ林（高木）の植生や里山活動によって創出される飛翔空間や採餌場所はオオタカの生息地に適しており、木津北地区は貴重種の生息空間としても重要な地区である。
- ・里山として人の生活と密接に係わってきた木津北地区では、都市部の安全・安心（地すべり・土砂流出等の防止）な生活の確保、固有の農作物（鹿背山柿）の生産等が行われてきた。
- ・鹿背山柿は「鹿背山の柿を育てるネットワーク」による栽培の取組みが行われている。
- ・また、オオタカやカスミサンショウウオといった貴重種については、市民団体による主体的な保全活動等が展開されている。
- ・一方、木津東地区では全体的になだらかで、農地（耕作地）として活用されるほか、地質的には大阪層群が残るものの礫層のため、湧水湿地は形成されにくい。
- ・木津東地区では、この水はけのよい地質的特徴を活かした固有の農作物（梅谷大根）がある。

自然と人との係わりを踏まえた特性

- ・木津北地区は都市と自然（山・川・平地）との接点であり、エコトーン（水辺、森林の辺縁部等の異なる環境が移行する空間）が形成された、多様な生物が生息できる豊かな環境を有す。
- ・また、学研都市や周辺都市の生活環境を支える水源涵養のみならず、地すべりや土砂災害の防止等による都市部の安全・安心を確保するため、江戸の頃より市民が主体となって管理等を実施してきた。
- ・こうした点から、木津北地区は周辺の人口集積地へ生態系サービスを提供できる重要なフィールドである。
- ・さらに、木津北地区は室町及び戦国期の大和・山城地区の歴史・文化を考えるうえで極めて重要な鹿背山城跡の遺跡が残る重要な地区である。
- ・なお、木津町の頃から取組まれている、まち・自然・社会・生活が相互連携するまちづくりは、学研都市における生物多様性の保全、現在国内外で注目される里山の再生・資源的価値の創出、発生材・副産物等の安定供給による産業振興（資源活用）等を目指したものである。

学研都市における木津北・東地区の特性

- ・市民がふれあえる身近な自然、コミュニケーションの場等としての特性を持つとともに、歴史・文化等を体験・感じることでできる地区である。
- ・「関西文化学術研究都市サード・ステージ・プラン」に沿った取組みや実験・実証等を行うフィールドとして活用し、持続可能社会のための科学の実践の場となる可能性を有する地区である。
- ・また、都市と自然の接点に位置する木津北地区は生物の生息環境としてだけでなく、人々の文化や原風景（里山・緑や景観のシンボル）を感じる貴重な環境を有している。
- ・木津東地区では田園環境を活かした新たな交流活動の展開や多様なライフスタイルやニーズへの対応が可能な環境を有している。

図 木津北・東地区の特性

